最近の顕著な地震の表（1935年～1950年）

勝　又　　護*

§1. はしがき

大森博士の編さんされた「本邦大地震概表」[1]及び「本邦大地震概説」[2]に記載された地震以後の被害地震ついて竹花峰夫氏は「本邦大地震概表」[3]を作製された。又小平孝雄氏は東京で観測が始まつて以來の資料に基ずき「東京において感じた強震表」[4]を作製された。前者は昭和 10 年，後者は昭和 11 年迄で，以來相当な年数を経ている。そこで両氏の表の続きとも云うべきものを作製して見た。（ただし今回の表には台湾やその他の外地は除外した。）

この表では被害地震，及び測候所において震度 IV 以上が観測されたすべての地震を集録した。またそれらの地震の東京における震度をも記載した。資料は主として全国気象官署のものにより，僅かな被害の地震までひろつたつもりである。記事その他は表の性質上できるだけ簡單にしたが，大きな地震については多くの人の調査研究があり，巻末にも文献の表と記してあるから詳細についてはそれらを参照されたい。なお表は極力，誤り，脱落などの無いようにつとめたつもりであるが必ずしも完全とはいえない。特に 1945 年前後数年については，資料も社会の混乱の例外たるを得ず，多少の追加，訂正を要する個所もあるという可能性を否定出來ない。それらについてはお気付の方の御教示を受けて完全なものにして行きたいと思う。巻末の文献の表についても筆者の目にふれた範囲につき集録したもので，これらの他により多くの貴重な調査研究があり，また談話会などで発表され印刷物になつていないものもあることを附記してお断りする次第である。

§2. 震央分布図

表に記載された地震の震央の分布図を次頁に示す。図中の震央の記号で

●は大被害地震，○は局部的被害地震，◦は小局部的被害地震，•は無被害地震

を示す。番号は表と参照するためのものである。

§3. 地震の表

表の説明

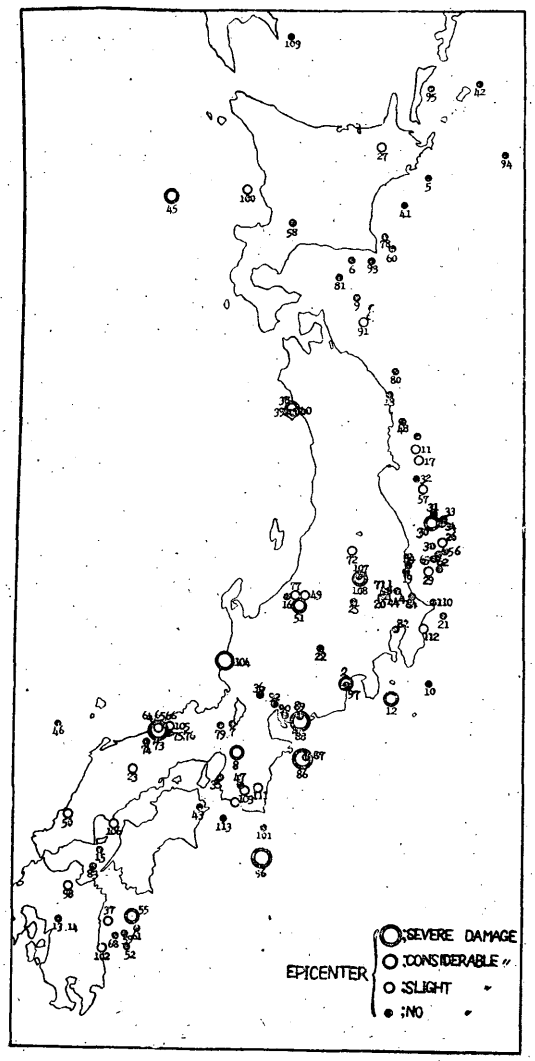
（1） 番号は震央分布図，地震の表，文献の表等に共通なものである。

---

* 中央気象台地震課

(1) 震災予防調査会報告，第 68 号.
(2) 同　上　　第 88 号.
(3) 驗震時報，第 8 巻.
(4) 地　震，第 9 巻.

Distribution of Epicenters (1935—1950)



（2） 番号の左に * 印のある地震は文献が巻末に記載してある。

（3） 番号の左に ∘ 印のある地震は津浪を伴つた地震なることを示す。

（4） 年は西暦を示す。括弧して下記してあるのは昭和の年号である。

（5） 規模らんのRは顕著地震(Remarkable), M は稍顕著地震 (Moderate), S は小区域地震 (Small felt Area), L は局発地震 (Local) を示す。

（6） 規模らんの太字に記してあるものは大小にかかわらず被害をともなつた地震であることを示す。

（7） 震央の緯度，経度の度以下の数字は特に分を表わす記号のないもののほかは，度の十分位あるいは百分位を示す。

（8） 記事らんのローマ数字は震度を示し，続いて記してある地名はその震度を観測した測候所名である。（被害地震で震度 IV 以上を観測した測候所の無い場合は震度 III の測候所名を記した。）

（9） 記事らんの末尾に括弧して記してあるのはその地震の東京における震度である。記してないものはすべて無感である。

番号	発震時 年	月日時分	規模	震央 地名	東経	北緯	記事（括弧内は東京での震度を示す）
1	1935	VI 21 04 29	S	筑波山附近	140°.05′	36°.25′	IV：筑波山．（II）
* 2	(10)	VII 11 17 24	R	静岡市附近	138°.26′	34°.59′	IV；沼津，三島，船津，甲府，姥子，横浜．静岡，清水市，有度村等に被害多く，計死者 9，負傷者 299，全

番号	発震時 年	月日時分	規模	震央 地名	東経	北緯	記事（括弧内は東京での震度を示す）
				壊住家 363，同非住家 451 等の被害を生じた。その他，清水港の岸壁，倉庫等の大破，道路鉄道の小被害を生じた。又久能山，有度山の南部は崖崩が著しかつた。余震はほとんど無く有感1回，無感7回が三島で観測された。			
3	1935	VII 19 09 50	R	鹿島灘	141. 30	36. 65	V；小名浜，IV；筑波山，会津.（II）
4	(10)	VII 31 17 12	S	筑波山附近	140. 2	36. 2	IV；筑波山，柿岡.（II）
5		IX 11 23 04	R	釧路南東沖	145. 1	42. 7	IV；釧路，根室.（I）
6		IX 18 17 24	R	浦河南西沖	142. 6	42. 0	IV；浦河.
7	1936	I 8 04 33	R	京都附近	135. 75	35. 00	IV；京都.
* 8	(11)	II 21 10 08	R	河内大和	135°40′.5	34.°31′	V；橿原，京都，大阪. IV；和歌山，津，彦根，敦賀・奈良県，大阪府の震央に近い地域に被害多く，計死者 9，負傷者 59，全壊，半壊家屋 148 を生じた。地変はほとんど無く，山地において小さな崖崩れが生じたのみであつた。余震は有感 28 回，無感 75 回が同月中に観測された。
9		VI 3 11 55	R	尻屋岬東方沖	142. 3	41. 3	IV；函館.
10		X 26 00 30	R	野島崎南南東沖	140. 1	34. 4	IV；伊東，沼津，勝浦，三島（III）
* 11		XI 3 05 46	R	金華山沖	142. 0	38. 4	V；仙台，石巻，小名浜・IV；福島水沢，盛岡，宇都宮，柿岡，筑波山，会津，前橋，熊谷，甲府，伊東. 極めて規模の大きい地震であつたが陸地にさして被害無く；宮城県，福島県の一部で屋根瓦，土蔵の壁の剝落，道路の亀裂等が所々に発生した。宮城県下では，この他負傷者 4，全壊非住家 3 等を生じた。又道路決潰は 35 ヶ所，延 225 間であつた。（III）
* 12		XII 27 09 14	R	新島沖	139. 10	34. 25	IV；伊東，横須賀. 新島，式根島に被害多く，両島で死者 3，負傷者 70，家屋全壊 35，半壊 473，等の被害を生じた。又両島では著しい崖崩れが隨所に発生した。この地震の前数回（1 時 47 分，1 時 57 分，2 時 05 分，2 時 06 分. 以上無感，9 時 12 分有感）の前震があつた。なお引続き相当数の余震が数日に亘り発生した。（I）
13	1937	I 27 16 04	M	熊本市附近	130. 82	32. 72	IV；熊本
14	(12)	I 28 09 43	S	同上	130. 8	32. 7	IV；熊本
15		II 27 23 42	R	室津半島沖	132. 1	33. 7	IV；松山，多度津，，四阪島.
16		VII 4 00 23	S	新潟県焼山附近	138. 03	36. 88	IV；長野
17		VII 27 04 56	R	金華山東方沖	141. 97	38. 23	V；石巻，IV；仙台，福島，水沢，水戸，筑波山. 石巻市で石造燈籠 16 基倒壊，その他商店の小被害，陶器類，水道管の破損等が市内に発生した。（II）
18		VIII 5 11 14	S	宮古附近	142. 00	39. 33	IV；宮古.
19		IX 7 01 02	M	那珂川河口附近	140. 6	36. 4	IV；筑波山.（II）
20		IX 29 07 55	M	茨城県結城附近	139. 9	36. 2	IV；宇都宮.（II）
21		X 17 13 47	R	犬吠岬南東沖	141. 0	35. 5	IV；銚子，勝浦，柿岡.（III）
22		XI 23 2 39	M	山梨県駒ヶ岳附近	138° 15′	35° 46′	IV；甲府.（I）
23	1938 (13)	I 2 16 54	R	岡山県阿哲郡南西部	133° 22′	34°.53′	III；岡山. 伯備線神代駅近傍で岩石の落下あり，貨車，及び附近の家屋に小被害を生じた。又熊谷で小貯水池の堤の破損があつた。

番号	発震時 年	月日時分	規模	震央 地名	東経	北緯	記事（括弧内は東京での震度を示す）
* 24	1938 (13)	I 12 00 12	R	田辺湾沖	135°10′	33°43′	V; 御坊，徳島．IV; 潮岬，和歌山，洲本，橿原，室戸，神戸，津，京都，高知，彦根，豊岡，四阪島．極めて大規模な地震であつたが陸地にはほとんど被害なく，ただ震央に近い和歌山県日高郡・西牟婁郡等の沿岸で，屋根瓦の落下，土塀崩壊，家屋の小破損，落石，燈籠の転倒，道路，埋立地の亀裂等が発生した。又炭竈の破損により山火事を発生した所もある。
25		II 07 23 43	R	埼玉県本庄附近	139° 13′	36° 15′	IV; 熊谷，柿岡，筑波山，宇都宮東京，甲府，横須賀．（IV）
* 26		V 23 16 18	R	塩屋崎東南東沖	141. 45	36. 70	V; 小名浜，水戸，柿岡，会津，福島．IV; 仙台，筑波山，宇都宮，熊谷，横浜，前橋，甲府，水沢，横須賀．極めて大規模な地震であつたが被害はほとんど無く，小名浜附近の沿岸，福島，郡山，須賀川，猪苗代，矢吹，白河等で家屋や土蔵の剝落，亀裂，道路，水道，その他煙突，商品の小損害等を生じた。又高萩町では工場の建物，施設等に被害があつた。（III）
* 27		V 29 01 42	M	北海道屈斜路湖附近	144. 3	43. 6	III; 根室，釧路．小さな地震であつたが局地的にはかなり震動は強く被害を生じた。特に屈斜路湖西方の諸部落で道路の地割れ，地辷り山崩れ等を生じ，家屋にも小被害があり，サツテキナイでは死者 1，倒壊家屋 5，半壊 2，札友内では倒壊家屋 2，弟子屈附近では鉄道沈下，美留和駅の建物の小被害等を生じた。なお湖水の水面は約 40 糎の振動をした。
° 28		VI 10 18 53	R	宮古島北々西沖	125. 2	25. 3	IV; 宮古島．地震後津浪が宮古島及び附近の島々に來襲し，宮古島平良港では震後 10 分程で 1 米程引き次いで 1.5 米の上昇を示した。このため棧橋の流失，艀，帆船の損害等を生じた。なお多数の余震が発生し 6 月中に 400 回に達した。
29		IX 22 03 52	R	鬼島灘	141. 05	36. 35	V; 水戸．IV; 小名浜，銚子，筑波山，福島，柿岡．相当大規模な地震であつたが被害は水戸で僅少あつたのみである。（III）
*° 30		XI 05 17 43	R	福島県東方沖	141. 65	37. 10	V; 小名浜，福島，仙台，石巻，会津，水戸，筑波山．IV; 柿岡，熊谷，東京，水沢，前橋，横浜，横須賀，船津，甲府，宇都宮，山形，追分，足尾．極めて大規模な地震で福島県下の所々に小被害を見た。県下で死者 1，負傷者 9，全壊住家，同非住家 16，半壊家 29，非住家 42 等を生じた。又小規模な崖崩 4，道路の亀裂，鉄道の築堤及び橋脚の沈下等が生じた。震後小津浪が來襲し小名浜では全振幅 107 糎を示した。引続き極めて多数の余震が続発した。（IV）
° 31		XI 05 19 50	R	同　上	141. 70	37. 15	V; 福島，小名浜，仙台，石巻，会津，IV; 甲府，柿岡，水沢，水戸，熊谷，宮古，筑波山，山形．軽微な津浪を伴う。（III）
° 32		XI 06 17 54	R	同　上	141. 75	37. 55	V; 福島，小名浜，会津．IV; 仙台，柿岡，水沢，秋田，石巻，山形，水戸，筑波山．軽微な津浪を伴う。（III）
° 33		XI 07 06 39	R	同　上	141. 85	37. 15	IV; 水戸．微弱な津浪を伴う。（II）
34		XI 30 11 30	R	同　上	141. 8	37. 0	IV; 小名浜，柿岡，水戸．（III）

番号	発震時 年	月 日 時 分	規模	震央 地名	東経	北緯	記事（括弧内は東京での震度を示す）
35	1939	I 20 09 28	L	和歌山市附近			IV; 和歌山.
36	(14)	II 12 05 30	M	関ヶ原附近	136. 6	35. 4	IV; 京都.
37		III 20 12 22	R	日向灘北部	131. 8	32. 4	IV; 熊本，清水，宮崎，鹿児島，大分．宮崎，大分の両県下で震動はかなり強く，佐伯町で被害戸数 13，蒲江町で 5，津久見町で 10，臼杵町で 7，その他商店の商品等に小被害があつた。この他，鶴崎町，三佐村，大分市，合川村，上緒方村，竹田町，別府市等で軽微な損害を生じた。余震も小数発生した。
※ 38		V 01 14 58	R	男鹿半島	139.°49′	39°.57′	V; 秋田．IV; 水沢．震央は同半島北海岸で，南秋田郡及び山林郡の一部で被害を生じた。又山形県下に小被害があつた。被害は合計死者 27，負傷者 52，住家全壊 479，同半壊 858，非住家全壊 106，同半壊 156 等を生じた。なお秋田市では薬品倉2棟，船越では 9棟の家屋を全焼した。又男鹿半島北海岸に相当大規模な地変を生じた。津浪は軽微ながら観測され土崎港で最大全振幅 27 糎が記録された。余震は同月 5 日迄に有感 43 回，無感は 31 日迄に 245 回起つた。（I）
39		V 01 15 00	R	同　上	139. 9	39. 8	V; 秋田．
40		V 02 01 05	M	同　上	139. 9	39. 8	IV; 秋田．
41		X 22 23 39	R	釧路南南西沖	144. 2	42. 4	IV; 根室．
42		XII 16 19 47	R	色丹島南東沖	147. 2	43. 7	IV; 根室．（稍深発地震）
43	1940	V 28 23 23	M	徳島県那賀郡中部	134. 5	33. 8	IV; 洲本．
44	(15)	VII 15 00 31	M	茨城県水海道附近	140. 0	36. 1	IV; 筑波山，横浜，柿岡（III）
※ 45		VIII 02 00 08	R	神威岬北西沖	139. 1	44. 3	IV; 羽幌．極めて大規模な地震であつたが地震による被害は殆んど無く，震後の津浪により被害を生じた．津浪は日本海沿岸各地を襲い，漁船，漁具等の流失多く，かなり甚大な被害を生じた。羽幌，天塩等で波高は 2 米内外で，特に天塩河口附近で著しく溺死者10を出し，その他家屋，発動機船等に被害を生じた。寿都，稚内附近でも漁船その他漁具の流失等があり又軽微乍ら地震による被害もあつた。利尻島では特に高く（神磯北部で 9 尺 5 寸以上）小船舶の被害は多数に上つた。本州及び佐渡ヶ島等にも津浪が及び金沢，宮津で 2,3尺が観測された。特に佐渡ヶ島の一部では小被害を生じた。又朝鮮咸鏡北道鏡城郡大津港でも小被害を見た。引続き余震が相当数発生した。
46		VIII 14 00 36	R	隠岐島西方沖	132. 1	36. 1	IV; 松江，境，米子．
47		XI 18 21 47	R	和歌山龍神附近	135. 5	34. 0	IV; 和歌山，橿原，京都．（I）
48		XI 20 00 01	R	岩手県稜里岬沖	142. 0	39. 0	IV; 宮古，石巻．（II）
49	1941	III 07 12 00	L	長野県中野町附近			III; 長野．極めて小規模な地震であつたが震央附近の震度はかなり強く，岩石，土砂の崩壊した所もあつた。余震も地鳴を伴う軽微なものが若干発生した。
50	(16)	IV 06 01 50	R	山口県須佐附近	131. 65	34. 60	IV; 四阪島．この地方としてはまれに見る大きな地震で，震央に近い山口県，島根県境の北部では小被害を生じた。山陰線石見本線石見津田駅，奈古駅間の線路の築堤に亀裂，橋脚の沈下等が生じた。又益田，津田駅間で線路が 10 糎程沈下し（数日來の降雨の影響にもよる。）．そのため貨物列車の顚覆が起つた。須佐町及びその附近では土塀の崩壊，土蔵壁の剝落，道路の亀裂，墓石の転倒等が生じた。余震は有感 5 回，無感 6 回が発生した。

番号	発震時 年	月日時分	規模	震央 地名	東経	北緯	記事（括弧内は東京での震度を示す）
* 51	1941	VII 15 23 45	R	長野市附近	138°.16′	36°.42′	VI; 長野. IV; 軽井沢. さ程大きい地震ではなかつたが局地的にはかなり震動は強く，長野市及び附近の村では死者 5，重傷者 3，軽傷者 15，住家全壊 29，半壊 115，非住家全壊 48，半壊 122 を出した。本震前 21 時 45 分（III），22時 58 分（I）更に引続き 6 回の無感地震があつた。余震も引続き発生し 7 月中に有感 70 回，無感 356 回に及んだ。（I）
52		VII 20 01 13	R	日向灘	132. 0	31. 9	IV; 宮崎.
53		VII 24 22 54	R	奄美大島附近	129. 3	28. 2	IV; 名瀬.
54		X 07 08 47	S	那珂川河口附近	140. 7	36. 4	IV; 小名浜.（II）
* 55		XI 19 01 46	R	日向灘	132. 4	32. 3	V; 宮崎. IV; 宇和島，清水，大分，熊本，福岡. 極めて規模の大きい地震で，大分，宮崎，熊本の各県下の各地に小被害があつた。被害は計死者 2，負傷者 18，全壊家屋 18，半壊家屋 32 等を生じた。又震後小津波浪が九州の東岸，四国の西岸に來襲したが波高 1 米程度で大した事は無かつた。余震は 30 日迄に有感 23 回無感 71 回が起つた。
56		XI 26 00 20	M	鹿島灘	141. 4	36. 5	IV; 水戸.（II）
57	1942 (17)	II 21 16 08	R	金華山南南東沖	141. 8	37. 7	IV; 仙台. 宮城県刈田郡下の発電所のコンクリート堤防に亀裂を生じた。（II）
58		III 06 04 48	R	北海道空知南西部	141. 7	43. 0	IV; 八戸.（深発地震）（I）
59		IV 13 23 06	M	日向灘	132. 0	32. 1	IV; 宮崎,
60		VII 8 09 20	R	襟裳岬沖	143. 6	41. 9	IV; 釧路,
61		VIII 22 18 01	R	日向灘	132. 3	32. 2	IV; 大分,
62		IX 9 01 07	R	那珂川河口沖	141. 3	36. 5	V; 小名浜，IV; 水戸，福島，白河，筑波山（III）
63		XI 6 02 12	R	鹿島灘	141. 2	36. 4	IV; 小名浜，福島.（II）
* 64	1943 (18)	III 4 19 13	R	鳥取県加露附近	134. 2	35. 6	V; 鳥取. 震央附近で多少の被害を生じた。（被害は翌日の地震と合計して記す。）
65		III 4 19 35	R	同　上	134. 2	35. 6	IV; 鳥取.
* 66		III 5 04 50	R	鳥取県浜村沖	134. 2	35. 6	V; 鳥取. IV; 宮津，多度津，被害は前日のものと合計して軽傷者 11，倒壊家屋（非住家，塀等を含む）66 ヶ所，半壊（同前）594 ヶ所その他を生じた。
67		IV 11 23 46	R	鹿島灘	141. 25	36. 25	IV; 小名浜，柿岡，筑波山，福島（II）
68		IV 12 18 01	M	日向灘	131. 9	32. 1	IV; 宮崎.
° 69		VI 13 14 12	R	八戸東方沖	142. 7	40. 9	IV; 八戸，浦河，青森，八戸で小津浪が観測され最大全振幅 26 糎であつた。（I）
70		VI 15 20 11	R	八戸沖	142. 5	41. 1	IV; 青森.
71		VII 1 13 29	M	茨城県下妻附近	140. 0	36. 2	IV; 水戸，筑波山，柿岡，小名浜横浜.（III）
* 72		VIII 12 13 50	R	福島県田島附近	139. 8	37. 3	III; 白河，筑波山. 震央附近で崖崩れや壁の剝落等の軽微な被害があつた。余震は 8 月中に有感 18 回，無感 21 回が観測された。（I）

最近の顕著な地震の表（1935年～1950年）——勝又

番号	発震時 年	月日時分	規模	震央 地名	東経	北緯	記事（括弧内は東京での震度を示す）
*73	1943	IX 10 17 37	R	鳥取県野坂川中流域	134. 2	35. 5	VI; 鳥取. V; 岡山. IV; 豊岡, 米子, 境, 西郷, 宮津, 松江, 高松, 福井, 洲本, 京都, 神戸, 大阪, 彦根, 高知, 徳島, 松永, 波止浜, 津山. 鳥取市に被害著しく, 隣接した気高, 東伯, 岩美, 八頭の各郡にも相当な被害があつた。被害は合計死者 1005, 重傷 2426, 家屋全壊 7527, 半壊 6211, 全焼 16, 道路損害 55 ヶ所, 橋梁損害 19 ヶ所, 河川の堤防損害 42 ヶ所, 小工場の被害大なるもの 20 全壊 70 棟に及んだ。又兵庫県北西部浜坂村附近にも小被害があつた。この他地割, 地変等多く, 吉岡附近及び鹿野附近には断層を生じた。余震も引続き極めて多数発生した。
74		IX 10 18 05	M	鳥取県倉吉附近	133. 8	35. 4	IV; 岡山, 波止浜.
75		IX 11 02 35	S	鳥取県野坂川中流域	134. 2	35. 5	IV; 鳥取.
76		IX 15 19 31	S	鳥取県若櫻附近	134. 4	35. 4	IV; 鳥取.
77		X 13 14 42	M	長野県古間村	138°.13.′3	36°.48.′3	IV; 長野. 小さな地震であつたが震央附近では被害を生じた。被害は計死者 1, 重傷者 4, 軽傷者 10, 全壊住家 14, 同非住家 20, 同半壊住家66, 同半壊 50, その道路の亀裂, 土砂崩潰, 鉄道線路の破損等が起つた。余震は 10 月中に有感 8 回, 無感 152 回が発生した。
78		XII 3 15 52	R	襟裳岬北東沖	143. 5	42. 1	IV; 釧路.
79		XII 29 16 45	S	京都市西方	135. 6	35. 1	IV; 京都.
80	1944	I 11 10 34	R	宮古北東沖	142. 4	39. 9	IV; 宮古, 八戸.
81	(19)	II 1 14 15	R	襟裳岬西方沖	142. 1	41. 8	IV; 浦河.
82		III 19 17. 34	S	品川沖	139. 8	35. 6	IV; 熊谷. (III)
83		VI 7 19 15	R	大分県国東半島沖	131. 9	35. 5	IV; 大分.
84		VI 16 13 17	R	霞ヶ浦附近	140. 5	36. 0	IV; 柿岡. 筑波山. (III)
85		XII 1 23 55	R	金華山北東沖	142. 1	38.′6	IV; 宮古.
*86		XII 7 13 36	R	東南海沖	137. 0	34. 0	VI; 津, 御前崎. V; 尾鷲, 橿原名古屋, 甲府, 亀山, 彦根, 浜松, 岐阜, 敦賀, 福井. IV; 潮岬, 和歌山, 洲本京都, 神戸, 室戸岬, 伊吹山, 高松, 飯田, 静岡, 高知, 三島, 松本, 東京秩父, 富山, 輪島. 大規模な地震で, 被害も大きく, 静岡, 愛知, 三重の諸県に被害大きく岐阜, 奈良, 滋賀の諸県にも被害が及んだ。被害は合計, 死者 871, 負傷者 1859, 住家全壊 13586, 同半壊 11854, 非住家全壊 16686, 同半壊11854, その他極めて多数の被害があつた。特に名古屋重工業地帯の被害多く, 又鉄道では東海道線の列車顚覆 12 を数えた。又震後津浪が来襲し熊野灘沿岸は特に波高高く 6～8 米に及び所によつては 10 米にも達した。このため流失家屋 3000, 溺死者約 250, 流失船舶多数を出した。なお津浪は遠く伊豆下田をも襲つた。地変も大規模に起り海底は詳でないが, 鳥羽及紀伊半島勝浦附近で 20～30 糎の沈下を見た。引続き極めて多数の余震が発生した。 (IV)
87		XII 12 19 25	R	志摩半島南南東沖	137. 1	34. 0	IV; 津. (II)
*88	1945 (20)	I 13 03 38	R	渥美湾	137. 0	34. 7	V; 津. IV; 飯田, 名古屋, 亀山伊吹山, 岐阜. 前年の東南海地震の余震の一つと思われる。この前 11日頃から多数の地震が発生した。この地震はさして規模の大きなのではないが被害は甚大で, 愛知県下に特に激しく, 静岡県の一部にも小被害があつた被害は計死者 1180, 重傷 254. 軽傷 267, 住家全壊 3046, 同半壊2278, 非住家全壊 1489, 同半壊 1218 に及んだ。又 10 数粁に亘る明瞭な逆断層が生じた。津浪は蒲郡町で 1 米程度の高さに及んだが被害は無かつた。

番号	発震時 年	月 日 時 分	規模	震央 地名	東経	北緯	記事（括弧内は東京での震度を示す）
89	1945	I 6 22 36	R	渥美湾北部	137. 1	34. 8	IV; 津.
90		I 19 03 18	R	三河湾北部	137. 0	34. 8	IV; 津.
91		II 10. 13 58	R	八戸北東沖	142. 1	40. 9	V; 八戸, IV; 青森, 浦河, 盛岡. 八戸にて電話不通, 小中町附近で壁の剝落, 三日町附近でガラスの破損があつた。 (II)
92		III 22 17 33	M	木曾川河口附近	136. 7	35. 1	IV; 亀山.
93		IV 10 10 22	M	浦河南方沖	143. 0	41. 8	IV; 浦河.
94		VI 22 18 19	R	納沙布岬南東沖	147. 0	42. 4	IV; 根室.
95		X 9 23 37	R	国後島附近	146. 1	44. 1	IV; 根室（稍々深発地震） (I)
*96	1946 (21)	XII 21 04 19	R	南海道沖	135. 6	33. 0	V; 潮岬, 尾鷲, 橿原, 徳島, 洲本. 彦根, 岐阜, 高知, 四阪島, 津. IV; 大阪, 神戸, 京都. 亀山, 鳥取, 名古屋, 敦賀, 金沢, 波止浜, 宮崎, 熊本, 温泉岳, 熊谷. 極めて大規模な地震で, 広範囲に亘り甚大な被害が発生した。特に高知, 和歌山, 徳島の諸県に被害多く, 香川, 兵庫, 愛媛, 大阪, 三重, 岡山の諸府県がこれに次ぎ, その他九州, 四国, 中国, 近畿, 中部の諸県に一部被害が生じた。被害は合計死者 1362, 負傷者 2632, 行方不明 102, 家屋全壊 11506, 半壊 21972, 流失家屋 2109, 浸水家屋 33093, 焼失家屋 2602, 船舶流失, 破損 2991, 橋梁損壊 160, 堤防決潰 294, 道路決潰 1329, その他甚大な被害を生じた。震後の津浪も著しく, 和歌山, 徳島, 高知, 三重の沿岸に被害を及ぼした。又大なる地変を生じ総括的に見ると四国南部紀伊半島南岸で隆起し 1 米以上に及んだ所もある。震後極めて多数の余震が広範囲に発生した。 (II)
97	1947 (22)	III 11 14 16	R	静岡市附近	138. 4	34. 9	IV; 静岡.
98		V 9 23 05	R	大分県日田盆地	131. 1	33. 3	III; 飯塚, 熊本, 阿蘇山. 日田市及びその附近で壁, 屋根瓦等の被害, 道路の破損, 崖崩れ等が生じた所もある。又多少の余震が引続き発生した。
99		IX 27 01 04		石垣島附近	124. -	24. -	V-IV; 石垣島.
°100		XI 4 09 09	R	留萌西方沖	141. 0	43. 8	IV; 留萌, 羽幌. 北海道西海岸に小津浪が來襲し, 稚内区内の一部では最高 2 米に及び小舟舶の破損, 漁具の損害等が生じた。羽幌附近においては波高は 70 糎（平均潮位より）であつた。余震も引続き相当数発生した。
*101	1948 (23)	IV 18 01 11	R	潮岬南方沖	135. 6	33. 1	IV; 潮岬, 徳島, 洲本. 小津浪を伴う。（串本で約 33 糎） (I)
102		V 9 11 09	R	日向灘	131. 5	32. 0	IV; 宮崎, 熊本. 宮崎県, 鹿児島県の一部で壁土の落下, 瓦のずれ等があつた。余震も少数発生した。
*103		VI 15 20 44	R	富田川上流域	135. 5	33. 8	IV; 和歌山, 神戸, 大阪, 潮岬, 尾鷲, 洲本, 伊良湖, 橿原, 室戸岬, 和歌山, 奈良, 三重の諸県で小被害があつた。和歌山県西牟婁地方はやや被害が大であつた。被害は計死者 2, 負傷者33, 倒壊家屋 60, 損害家屋多数を生じた。又震央附近の山間では道路, 水路等に相当な被害を受けた。余震は翌月上旬までに 80 数回大阪で観測された。 (I)

番号	発震時 年	月日時分	規模	震央 地名	東経	北緯	記事（括弧内は東京での震度を示す）
* 104	1948	VI 28 16 13	R	福井市附近	136°.15′	36°.07′	VI; 福井. IV; 宮津. 金沢, 敦賀 富山, 彦根, 高山, 名古屋, 亀山, 輪島, 飯田, 橿原, 京都, 伊良湖. 被害地域の狭い割にその被害は極めて著しかつた。被害は福井市, 同県下の足羽郡, 吉田郡, 坂井郡に特に著しく, その他大野郡, 今立郡, 石川県下の江沼郡, 能美郡, 河北郡, 小松市等にも相当な被害があつた。被害は合計死者 3769, 負傷倒 22203, 倒壊家屋 36184, 半壊 11816, 焼失 3851, この他 福井県下の紡績工場は 60 % 以上が被害を受ける等, 甚大な被害を生じた。又道路, 堤防, 橋梁, 港湾施設, 通信機関, 田畑等の損害も甚大であつた。震後の火災は福井, 丸岡が著しかつた。又, 大きな地変を生じ, 上下断層を生じた。余震は引続き極めて多数発生した。 (I)
* 105	1949 (24)	I 20 22 25	R	但馬西部	134. 6	35. 6	IV; 豊岡, 福井, 兵庫県下の震央に近い照來村, 浜坂町, 温泉町等にて僅少な被害があつた。引続き少数の余震が発生した。
* 106		VII 12 01 10	R	安芸灘	132. 5	34. 0	III; 広島, 下関. 高知, 宇和島, 浜田, 高松, 鳥取, 米子, 福岡, 松山, 松江, 清水. 呉市では死者 2 名道路亀裂, 屋根瓦落下, 壁の亀裂又水道, 電線等に小被害あり。 又下松市では負傷 2, 壁の落下, 電線切断, 商店のガラスの破損等があつた。
* 107		XII 26 08 17	R	栃木県今市町附近	139. 7	36. 7	IV; 柿岡, 熊谷, 水戸. (III)
* 108		XII 26 08 25	R	同 上	139. 7	36. 7	IV; 宇都宮, 柿岡, 熊谷, 水戸. (III) 前震に次いで発生したが, 被害は主として後のものによるものと思われる。小さな地震であつたが震央附近で被害を生じ, 死者 8, 行方不明 2, 負傷者 162, 住家全壊 278, 同半壊 3091, 小損害 1631, 非住家全壊 583, 同半壊 2235, 小損害 2686等を生じた。被害は石造建造物に特別多かつた。又局地的ではあつたが地辷り, 崖崩れ, 山津浪等の地変が 60 ヶ所以上も生じた。引続き多数の余震が発生した。 (III)
109	1950	II 28 19 21	R	オホーツク海南部	143. 8	46. 0	IV; 釧路, 浦河, 青森深発地震 (I)
110	(25)	IV 17 01 19	M	銚子附近	140. 9	35. 8	IV; 銚子. (II)
* 111		IV 26 16 05	R	熊野川中流域	135. 8	33. 8	IV; 潮岬, 尾鷲, 京都. 三重県北牟婁郡, 南牟婁郡で落石, 道路の亀裂, 木橋の小被害等が生じた所もある。上野市附近では貯水の堤の決潰等が起つた。又余震が数回発生した。 (I)
* 112		IX 10 12 21	R	九十九里浜南部沿岸	140. 5	35. 3	IV; 銚子, 横浜. 震央附近で地割れや電線の障害等を生じた所もある。 (III)
113		XI 6 02 37	R	紀伊水道	134. 8	33. 5	IV; 姫路.

§ 4. 主な文献の表

表に記載された地震についての文献を示す。番号は表と共通なものである。又○印のあるものはその地震のために特集されたもので, 多数の報告, 調査研究をふくんでいる場合が多いが内容の記載は省略した。

文　献

2 ○ 験震事報 **9**. No. 2. 静岡強震調査概報

地震研究所彙報 **13**. No. 4. 那須信治, 保田柱三; 昭和 10 年 7 月 11 日の静岡地震について。

萩原尊礼; 昭和 10 年 7 月 11 日の靜岡地震について。
金原寿郎, 竹村千幹; 昭和10年7月11日の靜岡地震震害調査報告。
齋田時太郎; 昭和 10 年 7 月 11 日の靜岡地震について。
松尾春雄; Damages to the Quay Walls of Simizu Harbour due to the Eeathquake on July 11, 1935, and the Seismic Stability of the Quay Walls.
昭和 10 年 7 月 11 日靜岡地震後における水準測量結果報告。

地　震 **7.** No. 9. 今村明恒; 靜岡地震管見。
No. 10. 吉山良一; 靜岡地震調査記。
〃 7 月 11 日靜岡地震による被害の様々。
No. 11. 松沢武雄; 靜岡地震実地調査報告。
No. 12. 福富孝治; 昭和 10 年 7 月 11 日靜岡地震に伴つた南伊豆蓮台寺温泉水位の異常。
12. No. 5. 同　上; 同　上

測候事報 **6.** No. 16. 和達清夫, 広野卓藏; 靜岡强震踏査報告（追加）

天気と気候 **2.** No. 8. 本多弘吉; 昭和 10 年 7 月 11 日, 靜岡强震について。

気象集誌 2nd Ser. **1.** No. 4. 藏重一彦; 靜岡强震の被害分布について。
藤原咲平, 正野重方, 長岡和歌子; 靜岡强震の被害に関する一考察。

土　木 **21.** No. 8. 靜岡地方国鉄震害狀況
21. No. 10. 靜岡地方震害報告。

8 ○ 驗震時報 **9.** No. 3. 昭和 11 年 2 月 21 日河内大和强震報告。

地震研究所彙報 **14.** No. 2. 那須信治; 萩原尊礼; 昭和 11 年 2 月 21 日河内大和强震調査報告。
宮部直巳; 昭和 11 年 2 月 21 日河内大和强震に関する調査報告。
齋田時太郎; 昭和 11 年 2 月 21 日河内大和强震被害の地質地形的考察。

地　震 **8.** No. 3. 吉山良一; 昭和 11 年 2 月 21日河内大和の地震調査報告。
9. No. 6. 同　上; 同　上

天気と気候 **3.** No. 11. 岸　彰忠; 河内地震の一考。

海　と　空 **16.** No. 6. 棚橋喜市; 墓石の転倒より見たる河内大和强震の震度について。

11 地震研究所彙報 **19.** No. 4. 高山威雄; 昭和 11 年 11 月 3 日金華山沖地震被害調査報告。
No. 3. 宮部直巳; Tunami associated with the Sanriku Earthquake that occured November 3, 1936.

12 驗震時報 **10.** No. 1. 三浦武亜; 昭和 11 年 12 月 27 日伊豆一新島强震とその前震及び余震の発震機構。
本多弘吉; 昭和 11 年 12 月 27 日伊豆新島强震地域踏査報告。

地震研究所彙報 **15.** No. 2. 永田武; 新島地震前後における同地方磁気伏角測定値の比較。
萩原尊礼, 表俊一郎; 昭和 11 年 12 月 27 日伊豆新島地震余震観測並びに踏査報告。

地　震 **9.** No. 2. 波江野清藏, 河角広
岸上冬彦, 松沢武雄; 新島强震による簡單な物体の変位。
鈴木武夫, 吉山良一

気象集誌 2nd Ser. **15.** No. 4. 吉松隆三郎; 昭和 11 年 12 月 27 日伊豆新島强震及び同 10 月 26

			日安房野島崎沖顕著地震と地震流の変化について。
	天気と気候	4. No. 2.	三浦栄五郎; 新島地震当日早朝の三原山。
24	験震時報	10. No. 2.	中央気台地震掛; 昭和 13 年 1 月 2 日和歌山県田辺湾沖地震調査報告。
			同　上; 昭和 13 年 1 月 2 日和歌山県田辺湾沖地震による被害，地変その他の現象。
			三宅恒夫，山本武夫; 昭和 13 年 1 月 2 日 和歌山県田辺湾沖地震強震地域踏査報告。
	地震研究所彙報	16. No. 2.	水上　武; 昭和 13 年 1 月 12 日，日御崎沖地震調査報告。
	地震	11. No. 7.	武者金吉; 小国地震日御崎沖地震及び盤城沖地震の発光現象。
	気象集誌 2nd Ser.	16. No. 7.	吉松隆三郎; 昭和 13 年 1 月 12 日紀伊水道強震と地電位差の異常.
26	験震時報	10. No. 2.	竹花峰夫，福田勝利; 昭和 13 年 5 月 23 日福島県塩屋崎沖地震踏査報告。
			柳谷喜太郎，高木一郎; 昭和 13 年 5 月 23 日福島県塩屋崎沖地震被害報告.
			福島測候所. 会津出張所; 昭和 13 年 5 月 23 日福島県塩屋崎沖地震被害報告。
	地震	10. No. 7.	飯田汲事; 昭和 13 年 5 月 23 日盤城沖地震による福島県猪苗代町及びその附近における被害。
		No. 9.	5 月 23 日の盤城沖地震による栃木県太田原町の墓石の被害。
		11. No. 7.	武者金吉; 前出，地震 Vol. 10.
	柿岡地磁気観測所要報	1. No. 2, No. 3.	吉松隆三郎; 昭和 13 年 5 月 23 日塩屋崎沖地震と地電流の異常。
27	地震	10. No. 7.	津屋弘逵; 昭和 13 年 5 月 29 日屈斜路地震調査報告。
		No. 8.	加藤愛雄; 昭和13年5月29日の屈斜路湖岸に発せる強震について。
		No. 12.	田中館秀三; 昭和 13 年屈斜路地震 I。
		11. No. 1.	同　上; 同　上 II.
	科学	8. No. 10.	石川俊夫; 5 月 29 日地震後の屈斜路地方見聞。
30	験震時報	10. No. 3, 4.	中央気象台地震掛; 昭和 13 年 11 月 5 日 福島県東方沖地震及び同余震調査報告。
			鷺坂清信，伊藤博; 昭和 13 年 11 月福島県東方沖地震津浪調査 。
			田島節夫，高田將一; 昭和 13 年 11 月福島県東方沖地震調査概報。
			植竹降治，鷺坂清信，小磁一雄; 昭和 13 年 11 月 福島県東方沖地震及び津浪地域踏査報告。
	地震研究所彙報	17. No. 1.	大塚弥之助; 昭和 13 年 11 月 5 日塩屋崎沖地震に関する調査報告。
	地震	11. No. 2.	加藤愛雄; 昭和 13 年 11 月 5 日の盤城沖の強震について。
	天気と気候	5. No. 11.	大橋朝三; 11 月 5 日 午後 5 時 47 分の地震における発光現象報告。
	科学	8. No. 14.	本多弘吉; 11 月 5 日福島県東方沖の地震及び同余震について(概報)。
		11. No. 2.	加藤愛雄; 昭和 13 年 11 月 5 日の福島県盤城沖強震について。
38	験震時報	10. No. 34.	鷺坂清信，波佐谷慶孝，半沢義男，山本福治; 秋田県男鹿半島地震地域踏査報告。
			中央気象台地震掛; 秋田県男鹿半島地震被害報告。
	地震研究所彙報	17. No. 3.	萩原尊礼; 昭和 14 年 5 月 1 日男鹿地震調査概報。
			宮部直巳，武井柳吉; 昭和14年5月1日男鹿地震の地変について。

大塚弥之助; 昭和 14 年 5 月男鹿半島地震の地変。
No. 4. 岸上冬彦, 飯田汲事; The Tunami that accompanied the Oga Earthquake of May 1. 1939.
18. No. 2. 萩原尊礼; The Oga Earthquake and Its Aftershoks.
19. No. 4. 陸地測量部; 秋田県男鹿半島附近震災地三角点水準測量記事。
地　震 11. No. 6. 岸上冬彦, 松沢武雄, 佐藤泰夫, 富永政実, 高木聖; 昭和14年5月1日牡鹿半島の地震踏査。
No. 7. 加藤愛雄; 昭和 14 年 5 月 1 日男鹿半島地震について。
No. 7. 男鹿震災各町村別各部落被害統計表。
No. 8. 岸上冬彦, 飯田汲事; 昭和 14 年 5 月 1 日男鹿半島地震の津浪。
No. 8. 今村明恒; 男鹿地震考。
No. 10. 同　上; 男鹿地震と海水及び魚族の異常狀況。
No. 11. 田中館秀三; 昭和 14 年 5 月男鹿半島地地震の際における地塊傾動について。
12. No. 1. 萩原尊礼; 昭和 14 年 5 月男鹿半島地震の余震分布。
No. 4. 田中館秀三; Vol. 11. 続稿。
地学雜誌 51. No. 10. No. 11. 遠藤六郎; 秋田県男鹿半島の地震について。
土　木 25. No. 9. 高井信一; 秋田県下の震災を視察して。
松村孫治; 同　上
45 地震研究所彙報 19. No. 1. 宮部直己; 昭和 15 年 8 月 2 日日本海北部の地震津浪（略報）。
地　震 12. No. 12. 同　上; 同　上。
51 驗　震　時　報 12. No. 3. 正務　章; 昭和 16 年 7 月 15 日長野强震調報告。
地震研究所彙報 19. No. 4. 岸上冬彦, 永田武, 宮村摂三; 昭和 16 年 7 月 15 日長野地震の統計的調査。
金井清; 昭和 16 年 7 月 15 日長野地震の家屋の被害について。
齊田時太郎; 善光寺平における民家構造と震害。
地　震 20. No. 1. 武井柳吉; 長野附近の水準改測。
No. 8. 長野地震と火災。
No. 9. 矢橋徳太郎; 昭和 16 年 7 月 15 日長野地方强震調査概報。
No. 11. 岸上冬彦; 昭和 16 年 7 月 15 日長野地震の調査。
No. 12. 長野地震にともなう精密水準測量。
天気と気候 8. No. 12. 森正吾; 昭和16年7月15日長野强震に際しての発光現象について。
科　学 11. No. 9. 今村学郎; 今年 7 月 15 日の長野地震とその直前における栃尾又温泉の変化に関する報告。
55 驗　震　時　報 12. No. 3. 鷲坂清信, 本間寧, 生沼明, 伊藤博; 昭和 16 年 11 月 19 日日向灘地震域踏査報告。
熊本測候所; 昭和 16 年 11 月 19 日日向灘地震の熊本県下の調査報告。
岡部龍信; 昭和 16 年 11 月 19 日日向灘地震実地踏査報告。
No. 4. 本間寧; 昭和 16 年 11 月 19 日の日向灘地震について。
64
66 (3 月 4 日. 3 月 5 日の鳥取県下の地震については 9 月 10 日の地震と共に後出す)
72 驗　驗　事　報 13. No. 2. 福島測候所; 昭和 18 年 8 月 12 日福島県会津地方の强震概報。

地　　震 **15**.　小林学；会津地方の地質構造と地震との関係。

73 ○ 昭和 18 年 9 月 10 日鳥取地震概報（附 3 月 4 日 5 日の地震概報）中央気象台。

驗震時報 **14**. No. 2.　高木聖；昭和 18 年 9 月 10 日の鳥取地震に伴う鉄道蛇曲現象に就いて。

高木聖，野依一郎，昭和 18 年 9 月 10 日鳥取地震の断層。

西毛品夫，高木聖，山之上昭和；昭和 18 年 3 月 4 日及び 5 日の鳥取地震に伴う発光現象。

地震研究所彙報 **21**. No. 3, 4.　表俊一郎；昭和 18 年 3 月 3 日 4 日鳥取地震調査報告。

22. No. 1.　津屋弘逵；鹿野，吉岡断層とその附近の地質。

表俊一郎；鳥取地震余震概報。

水上武；微動計による鳥取地震余震観測（概報）

宮村摂三；昭和 18 年 9 月 10 日の鳥取地震において鹿野，吉岡両断層及びその地震後の変動の精密水準測量による観測。

松沢武雄；鳥取大地震時の狛犬の運動。

萩原尊礼；断層の動きと地表傾斜変化の観測。

永田武；鹿野断層における鳥取地方震災復旧一等水準測量成果。

23 No. 1～4.　岸上冬彦；昭和 18 年 9 月 10 日鳥取地震の被害。

地　　震 **15**　表俊一郎；昭和 18 年 3 月 4 日鳥取地震調査概報。

今村明恒；鳥取地震所感。

岸上冬彦；昭和 18 年 9 月 10 日の鳥取地震の被害概況。

表俊一郎；昭和 18 年 9 月 10 日鳥取地震余震観測速報。

水上武，内堀定市；微動計による鳥取余震の観測；特に地盤の固有振動。

地学評論 **20**. No. 1.　築地明；鳥取地震の活断層にそう kernbut.

21. No. 7, No. 8.　築地明；鳥取地震における活断層と地形とに関する若干の観察。

建築雑誌 **58**. No. 58.　建築学会震災調査隊；鳥取県震災調査報告。

86 ○ 昭和 19 年 12 月 7 日東南海大地震調査概報　中央気象台。

○ 地震研究所速報（第 4 号）

地震研究所彙報 **24**. No. 1～4.　水上武，内堀貞雄；東南海地震について，特に震害と余震の分布。

表俊一郎；昭和 19 年 12 月 7 日東南海大地震に伴つた津浪。

同　上；東南海地震及び三河地震による地盤危険率の比較。

宮村摂三；東南海地震の震害分布（その一）

地　　震 **16**.　今村明恒；遠州沖大地震所感。

17.　宮村摂三；昭和 19 年 12 月 7 日の遠州沖地震の災害調査にあたり観測せる二つの特徴ある地変について。

科　　学 **16**. No. 6.　宮村拮三；震災と地盤との関係。

88 驗震時報 **14**. No. 3. 4.　井上宇胤；昭和 20 年 1 月 13 日の三河地震について。

金沢茂夫；三河地震の驗測結果報告。

地震研究所彙報 **24**. No. 1～4.　津屋弘逵；深溝断層（昭和 20 年 1 月 13 日，三河地震の際現われた一地震断層）

表俊一郎；昭和 24 年 1 月 13 日三河地震余震観測（序報）

同　上；前出 Vol. 24.

○ 水路要報増刊号　三河地震調査報告（三河湾の海底変化）
地　震 **17**.　今村明恒; 昭和 21 年 1 月 23 日渥美湾北部烈震の前徴について。

96 ○ 昭和 21 年 12 月 21 日南海道大地震調査概報　中央気象台.
○ 地震研究所速報（第 5 号）
地震研究所彙報 **25**. No. 1～4　力武常次, 村内必典; Tunami in Tsubaki-Tomari bay.
池上良平, 岸上冬彦; A Study on Overturning of Rectangular Columns in the Case of the Nankai Earthquake on December 21. 1946.
那須信治, 白井俊明; Local Phenomena of Tsunami (Part I)
永田武, 岡田惇; Land Deformation of the Muroto Point before and after the Nankaido Great Earthquake on Dec. 21 1946.
地　震 Ser. II. **3**. No. 1.　吉山良一; 南海道地区地震とその一余震について。
○ 水路要報増刊号　昭和 21 年南海道大地震報告（津浪篇）（地変及び被害編）（海底地形編）
地理調査所特報(1951年11号)　大森又吉; 南海災害地改測成果報告。
東大地珠物理学教室研究報告 No. 10.　吉田耕造, 山際, 梶浦, 鈴木; 南海地震津浪調査報告（和歌山県及び徳島県下実地踏査速報 I）
No. 17.　吉田耕造; 同　上　II（主として高知及び徳島県下踏査速報）
No. 29.　平尾邦雄; 南海地震後の地電流変化について I.
No. 32, 33, 34.　鈴木, 浅田; 南海地震後の余震について。
地 学 雑 誌 **56**. No. 6-7.　小笠原義男; 北四国の地盤沈下 — 南海地震に伴う地盤運動とその影響—四国地方地盤変動調査報告。
科　学 **17**. No. 6.　永田武; 昭和 21 年 12 月南海道大地震の調査研究結果から。

101 ○ 昭和 23 年 4 月 18 日の地震概報　大阪管区気象台。
103 ○ 昭和 23 年 6 月 15 日夜の紀州南部の地震概報　大阪管区気象台。
104 ○ 驗震時報（**14** 別冊）昭和 23 年 6 月 28 日福井地震調査概報。
○ 昭和 23 年福井地震調査研究速報（日本学術会議）
○ The Fukui Earthquake of June 28. 1948.（同上）
○ The Fukui Earthquake, Hokuriku region, Japan. 28 June 1948. I, II, G.H.Q.
○ 北陸震災調査概報 日本建築学会. 学術研究会議, 北陸害災調査団。
○ 同上（土木施設被害）. 土木学会, 学術研究会議北陸震災調査団。
○ 福井震災誌. 福井県.
○ 昭和 23 年 6 月 28 日福井地震報告. 新潟管区気象台。
○ 福井震災事業要誌　金沢逓信局。
地震研究所彙報 **22**.　那須信治; 地震断層の運動（その一）
地理調査所特報（昭和 24 年 5 月 10 日）福井地震の被害と地変。
○ 同　上　(1949年 第 5 集)
天 気 と 気 候 **14**. No. 9.　本多彪; 福井地震踏査報告。
科　学 **18**. No. 12.　永田武, 岡田惇, 福井大地震に伴つた地殻変動。
○ 防　災 **1**. No. 7.　福井震火災特集。

105	驗震時報（未刊）		昭和 24 年 1 月 20 日但馬西部の地震報告。
106	驗震時時（未刊）		昭和 24 年 7 月 12 日安芸灘生地震報告。
107 ○ **108**	驗震時報	**15**. No. 1.	栃木県地震調査報告。
	地震研究所彙報	**28**. No. 2	池上良平，岸上冬彦；昭和 24 年 12 月 26 日 今市地震における墓石の顚倒より推定した地震動の加速度。
		28. No. 3～4	P335 以後 下鶴大輔；今市地震による地下水の変化。
111	驗震時報	**16**. No. 2	昭和 25 年 4 月 26 日熊野川中流域の地震報告。
112	驗震時報（未刊）		昭和 25 年 9 月 10 日九十九里浜南部沿岸の地震報告。

以　　上

Tables of Remarkable Earthquakes in and near Japan

M. KATSUMATA (*Seismological Section, Cent. Met. Obs.*)

Destructive earthquakes and earthquakes having the intensity more than IV (CMO Scale) which occurred in and near Japan from 1935 to 1950 are listed. The distribution map of their epicenters and reference are also attached.